

4.4.6 ▶ 消防団員の手記

表4.4-6に示した岩手県、宮城県及び福島県で活動した消防団員の手記を紹介する。財団法人日本消

防協会の「東日本大震災全国消防団報告研修会」及び「消防団の闘い」に掲載されている手記から、活動状況が詳述されているものや今後の教訓となるものを掲載した。

表 4.4-6 被災地域の消防団員の掲載手記一覧

No.	活動県	タイトル	所属・氏名 ^{*1}	出典
1	岩手県	東日本大震災における消防団活動	山田町消防団 分団長 大石 秀男	財団法人 日本消防協会 東日本大震災消防団報告研修会 http://www.nissho-jyohou.jp/nisshohp_img/higashinihon-saishinsai/pdf/houkokusho03_yamadachou.pdf (平成25年1月21日参照)
2	岩手県	「おまえのおかげで助かった」の感謝のことを胸に	大槌町消防団 第2分団 部長 鈴木 亨	財団法人 日本消防協会 消防団の闘いー 3.11 東日本大震災ー
3	宮城県	東日本大震災：大津波がすべてを変えた	気仙沼市消防団 分団長 村上 貴敏	財団法人 日本消防協会 東日本大震災消防団報告研修会 http://www.nissho-jyohou.jp/nisshohp_img/higashinihon-saishinsai/pdf/houkokusho01_kesennumashi.pdf (平成25年1月21日参照)
4	宮城県	消防団無線を通じて知ったわが町壊滅の知らせ	気仙沼市消防団 第13分団 副分団長 三浦 弘一	財団法人 日本消防協会 消防団の闘いー 3.11 東日本大震災ー
5	福島県	家族に心配されながらも最後まで捜索を諦めなかった	南相馬市消防団 小高区団 副団長 片岡 芳廣	財団法人 日本消防協会 消防団の闘いー 3.11 東日本大震災ー
6	福島県	津波への警戒心薄かった地域住民	いわき市消防団 第2支団第1分団 庶務部長 吉田 一弥	財団法人 日本消防協会 消防団の闘いー 3.11 東日本大震災ー

^{*1} 所属、役職、階級等は東日本大震災にて対応した当時のもの

東日本大震災における消防団活動

岩手県山田町消防団
分団長
大石 秀男



山田町消防団第10分団分団長の大石です。今回、私たちが東日本大震災において経験した消防団活動を、全国の消防関係者の前で発表することが、皆さんの、今後の活動に少しでもお役に立てればと思い、発表することにしました。よろしくお願いします。

はじめに、私達が住んでいる山田町の位置についてですが、山田町は、岩手県沿岸のほぼ中央に位置しております。主な産業は、カキ・ホタテ・ワカメ等の養殖漁業と、鮭魚を中心にした水産業です。私も、カキとホタテの養殖棚を15台所有しておりましたが、津波ですべて流されてしまいました。

山田町の町制施行は昭和30年3月1日で、山田町・豊間根村・大沢村・織笠村・船越村が合併し、新山田町が発足しました。面積は263km²、人口は1万9,461人、世帯数は7,210世帯です。

山田町消防団の概要についてですが、消防団は、昭和30年3月に町が合併したことで、各地区の消防団も統合され、15の分団650人をもって山田町消防団が発足しました（図02）。その後、昭和40年の条例改正により、13分団400人の定員数をもって組織され、現在にいたっています。平成23年7月1日現在の実員数は347人で、充足率は86.75%となっております。

私が住んでいる大沢地区は、袴田・川向・山谷・新開地・上条・中条・下条・浜川目と8つの



図01

山田町消防団組織図

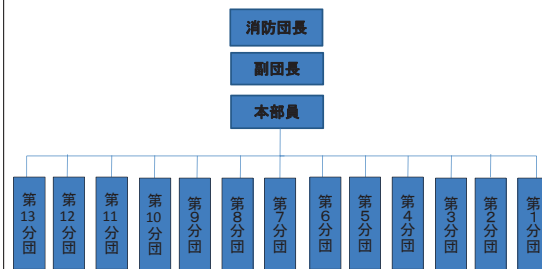


図02

行政区に分かれております。人口は2,219人、世帯数は727世帯で、多くの家庭が漁業関係の仕事をしております。また、団員の殆どが漁業に従事しており、その関係で、災害発生時は高い参集率であります。団員数は、ここ数年来30人と、定員数の100%です。

10分団管轄の水門・門扉

水門 7施設



門扉16施設



図03

門扉閉鎖活動



図05



図04

被災前の大沢地区西側は、国道45号が南北に走っており、国道の両側には、チェーン店のスーパーマーケットや衣料品店、ホームセンター等が建ち並んでいました。

被災前の大沢地区中央は、住宅が密集しており、県道が東西に走っています。県道の南側には、防潮堤が並行して作られており、すぐ漁港となっていました。

被災前の大沢地区東側は、埋め立て地で、漁業施設が建ち並んでいました。

第10分団が、岩手県及び山田町から管理委託されている水門門扉の数は全部で38施設です。その中で、津波注意報・警報発表時に閉鎖する施設は、水門が7施設、門扉が16施設となっております。

それでは、本題の東日本大震災にかかわる活動内容について、発表いたします。

東日本大震災にかかわる消防団の活動は、大き

く分けると2つになります。1つ目は、地震発生直後の活動で、水門門扉の閉鎖と、住民の方々の避難誘導です（図03）。この活動については、毎年、町の総合防災訓練で実施しておりますし、年に数回、津波注意報・警報が発表されますので、迅速に対応しました。

2つ目は、津波襲来後の活動で、このことは今まで全く経験したことがなく、津波によって破壊された建物の瓦礫が広範囲にわたり散乱し、消火活動や救助活動の妨げとなりました。

特に、安否不明者の搜索活動にあっては、破壊された建物の瓦礫の中からの搜索ということで、長期間に及び苦労しました。

水門門扉閉鎖活動ですが、各水門、門扉ごとに担当者を割り当てており、屯所より遠い所から閉鎖してきて、最後に屯所に集合し、全閉鎖を確認するようにしています（図04）。全閉鎖は、毎回8分ぐらいで完了しております。3月11日も約8分で完了しました。

門扉閉鎖活動です（図05）。この門扉の高さは4.8mで、海面から約6.4mになっております。門扉には、非常用の小さい扉が付いています。また、門扉脇の防潮堤には、非常用の階段も付いています。

避難誘導についてですが、山田町地域防災計画により、地区ごとに避難場所・避難所が示されております。

毎年実施される山田町総合防災訓練においても、各地区の皆さんは、指定された避難場所及び

車両の避難

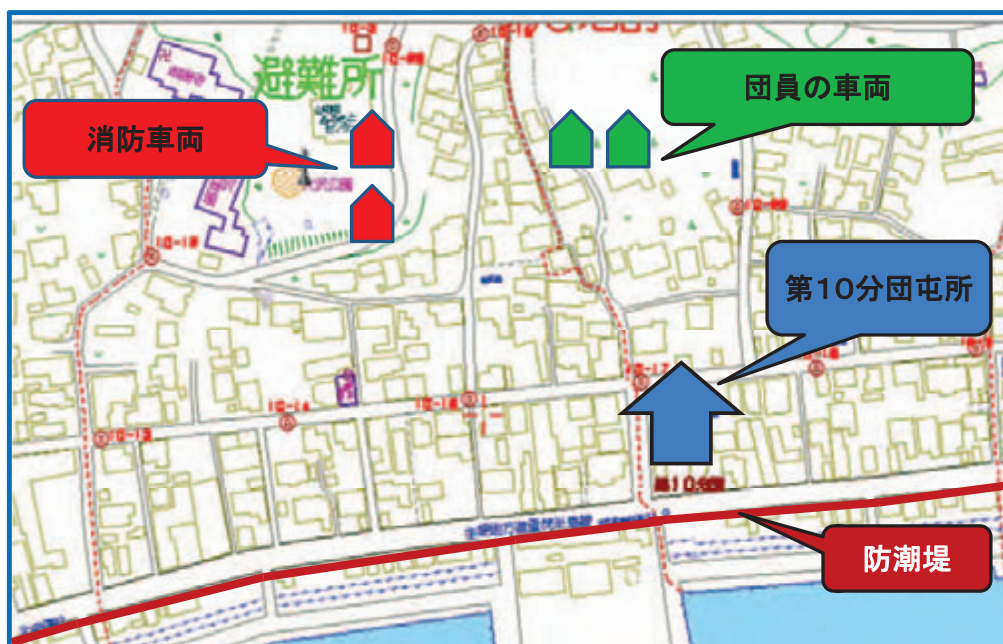


図06

津波襲来



図07

避難所に避難しておりますので、経路については、把握しておりました。

車両の避難についてですが、消防ポンプ自動車は、住民の方々を避難誘導しながら、避難所の「ふるさとセンター」に避難しました。また、団員の自家用車も高台の広場に避難させました（図06）。

津波襲来時の写真です（図07）。この写真は、住民の方が高台から撮影したもので、防潮堤をはるかに越える津波であったので、撮影者はさらに



図08

高いところに避難したそうです。

津波は、大沢地区の住宅の半分以上を飲み込んでしまいました。団員の殆どが住宅をなくし、被災後5日間は、2台の消防車両で仮眠をとりながら、消防団活動を実施しました。また、大沢地区が孤立したため、燃料を調達できず、エンジンを止めての車内仮眠となりました。東北の春は遅く、寒くて眠れない日々が続きました。

津波浸水状況です（図08）。この写真は、津波襲来時の写真を撮影した方が、高台に避難して撮

浸水の状況－1



図09

火災延焼中



図11



図10

影したものです（図09）。

救助活動については、津波が浸水した区域では、住宅の2階や屋根に救助を求める方々がいましたが、津波の水がなかなか引かなかったので、救助活動にはただちに取り組みませんでした。津波の水が引けてから、瓦礫の上を歩いて救助に向かい、要救助者を背負って避難所まで搬送しました。

浸水した津波が、徐々に引けていく写真です。

この写真は、避難所の「ふるさとセンター」に避難した住民の方が撮影したものです。

消火活動についてですが、津波襲来後間もなく、津波浸水区域内で火災が発生しました。避難所にいた団員の中から、留守番5人を残し25人で、津波浸水区域を避けて現場に向かいました。

現場への経路は、「ふるさとセンター」よりさらに高いところにある林道を経由して、もうひとつの避難所になっている「大沢小学校」の脇を通り、津波が浸水した所より上の道路にポンプ車を止めました（図10）。

現場到着時、火災は延焼中でした（図11）。こ



図12

火災鎮火



図13

の写真は、付近の住民の方が撮影したものです。写真中央に折り重なっています多数の車両は、黄色の屋根のカーショップから、流されてきたものです。

現場到着から放水開始、そして鎮圧までの活動ですが、現場において、最初に行ったのは、水利の確保です（図12）。津波により建物は倒壊し、風景は様変わりしていました。それでも、津波浸水前の建物のイメージがしっかりと頭の中に残っていたので、瓦礫の中から防火水槽を迅速に探し

出すことができました。そこへ、小型動力ポンプを部署し、瓦礫の上をホース延長しました。そして分水器を使用して、出火建物の南北に筒先を配備し、限られた水量を有効に活用し鎮圧しました。足元の悪い瓦礫の上でのホース搬送については、大変苦勞しました。しかし、軽量のホースを整備していたので、その点は助かりました。また、今回あらためて、防火水槽の大切さをしみじみと感じた火災現場でした。

火災鎮火の写真ですが、焼失した建物の周りには、津波で押し流されてきた、瓦礫が散乱しておりました（図13）。後から現場を見て、よくこの瓦礫の上をケガもしないで、迅速に消火活動ができたものと思っています。

消防隊は、自分たちしかないという必死の思いもあったのでしょう。

次に、搜索活動についてですが、津波による瓦礫により道路が寸断され、大沢地区が孤立した状態となりました。そのような状況下で、「ふるさとセンター」に避難していた大沢地区コミュニティの会長から、安否不明者の搜索の指揮を消防

搜索に使用したタグ



図14

団に委ねられました。そこで、団員が居住していた行政区ごとに団員を割り当て、安否不明者名簿を作成し、搜索を開始しました。このことが、後々、ご遺体を発見したときに、身元不明者を殆ど出さなかったよい結果となりました。

警察との連携についてですが、発見したご遺体は、発見場所・服装・顔を関係者に確認していただき、身元が判明した場合、身元を示したタグを付けて、避難所に一時安置しました。このとき、ご遺体を覆うものが何もなく、避難所のカーテンをはずして使用しました。このときは、何とも言いがたいものがありました。その後、警察に連絡して引き渡し、警察が町の指定安置所に搬送しました。

これが、実際に搜索に使用したタグです（図14）。すべて手作りです。紙も、ヒモも、避難所の「ふるさとセンター」にあったものを使用しました。

また、搜索活動において、団員疲労の軽減をはかるためローテーションも考えましたが、避難所にいる、住民の方々の搜索にかかる要望が強く、団員を休ませることができませんでした。

自衛隊との連携についてですが、3月15日から自衛隊が大沢地区に入り、本格的な搜索が開始されました。団員は自衛隊とともに行動し、ご遺体が発見されれば、安否不明者名簿と照らし合わせて、避難所にいる身元関係者と思われる方を発見現場に案内し、身元の確認を迅速に行いました。

2週間後、雪や低温で殆どの団員が体調を崩し

大沢地区西側



図15

大沢地区西側の被災状況



図16

た為、1日休みを取ることにしました。私はその時、まだ兄が行方不明だったので、ひとりで搜索に行こうとしたら、団員が自主的に搜索に参加してくれました。お陰様で、その日に兄を発見することができました。団員には、非常に感謝しております。

搜索活動は、1ヶ月以上続きました。ご遺体の発見も少なくなり、団員の肉体的・精神的疲労も蓄積してきたことから、4月17日の日曜日に、地元漁民の協力により漁船40艘にて、大沢地区海岸の一斉搜索を実施しました。参加人員は、地元の漁民、隣接の消防団員等約500人で、陸上と海上に分かれて搜索を実施しました。搜索の結果は、津波より破壊され折り重なった、養殖用イカダの中で1名のご遺体を発見し収容しました。この搜索活動をひとつの区切りとして、消防団による搜索活動を終了しました。

大沢地区西側の被災前の写真です（図15）。次に、大沢地区西側の被災後の写真です（図16）。

大沢地区東側



図17

大沢地区東側の被災状況



図18

被災状況航空写真



図19

この辺に、私の家がありました。後日、この辺まで流れているのを、発見しました。

大沢地区東側の被災前の写真です。ここが、第10分団の屯所です。

次に、大沢地区東側の被災後の写真です。ここが、第10分団の消防屯所があったところです。ここにある漁船は、私の船で、津波に流されて防潮堤を乗り越えてきたようです。見るのが、とても辛かったです。

大沢地区被災状況の航空写真です。写真中央の

2階建ての白い建物が、避難所の「ふるさとセンター」です。その左上の山際に建っている2階建ての建物が、もうひとつの避難所の「大沢小学校」です。

火災出動時の経路について、もう一度説明いたします。火災現場はここです。現場には、津波浸水区域を避けて、「ふるさとセンター」よりさらに高いところにある林道を経由して、「大沢小学校」の脇を通り、津波が浸水した所より上の道路にポンプ車を止めて、消火活動を開始しました。

消防屯所被災状況



図20

消防屯所の被災状況の写真です（図20）。建物は、基礎しか残っていません。飴のようにねじ曲がっている銀色の物体は、ホース乾燥塔です。

現在、消防ポンプ自動車及び広報車は、避難所の「ふるさとセンター」の敷地内に青空駐車し、2階の一部が10分団の仮詰所となっております。

消防活動における教訓は、消防団の特性である地域密着性、要員動員力、即時対応力を有効に活用出来たことです。また、瓦礫により道路が寸断され大沢地区が孤立し、分団独自の判断と行動となった状況下において、分団で所有していたトランシーバーが有効に活用されました（図21）。

地域密着性においては、団員が管轄区域内に居住していたので、安否不明者の搜索に関わる行政区ごとの名簿作成にあたり、団員を居住行政区の担当に割り当てました。このことは、顔の見える関係が構築されていたので、各家庭の被災時の家族構成まで把握できました。

要員動員力については、団員の殆どが漁業者で、消防屯所の近くで仕事をしていました。このことから、地震発生後間もなく、全団員が消防屯所に集合できました。今までの火災出動等においても、10分団は常に高い参集率でありました。

有効活用されたトランシーバー



図21

即時対応力については、団員は日頃の訓練により、災害対応の技術と知識を習得しており、水門門扉を迅速に閉鎖し、瓦礫の中からピンポイントに防火水槽を捜し出すことができました。このことは、日頃の訓練の積み重ねと、地元の地水利を正確に把握していたからこそ、できたことです。

今回、東日本大震災における消防団活動において、有効に活用されたのがトランシーバーです。このトランシーバーは分団独自で整備したもので、火災現場等において、筒先と車両の通信手段として活用しておりました。しかし、今回の大震災では、津波被害により防災行政無線のパンザマスト（鉄塔）が破壊され、役場及び消防署が被災し、道路が寸断され、大沢地区が孤立状態となりました。その状況下での、消火活動・救助活動・搜索活動等、さまざまな面でトランシーバーが有効に活用されました。

写真のトランシーバーのほかに、5機の新しいトランシーバーがありましたが、消防屯所に置いていたので、津波に流されてしまいました。その5機が残っていれば、活動にもっと貢献したものだと思っています。

以上で、私の発表を終わります。

被災地域の消防団員の手記（2）（岩手県 大槌町消防団）

「おまえのおかげで助かった」の感謝のことばを胸に



岩手県大槌町消防団
第2分団 部長

鈴木 亨（42歳）
消防団歴 23年（漁協勤務）

大槌町の概要と被害状況

大槌町は、岩手県の沿岸部に位置し、北に山田町・南に釜石市・西を遠野市に隣接している。総面積200.59km²で推計人口1万5,276人（平成22年現在）の水産業を主産業としている町である。作家井上ひさしが執筆した小説「吉里吉里人」で脚光を浴びた吉里吉里国は、大槌町がモデルである。

大槌町の消防団は、5分団構成で団員数217人（平成21年4月時点）であった。

3月11日の津波は、大槌町の隣接市である釜石市の検潮所で14時45分に10cmの引き波が観測されたが、その後15時21分に4.1m以上となった以降検潮所が障害となったこともあって記録は残されていない。大槌消防署の資料によれば津波が大槌町に襲来したのは15時20分頃であったようで、翌日にかけて13波の津波が大槌を襲ってきた。震災による大槌町の人的被害は、死者803人、行方不明者479人、負傷者不明であった。住家被害は、全壊3,092棟、半壊625棟であった。

消防団の人的被害は、平成23年8月31日時点で死者11名、行方不明者5名であり、物的被害は、7ヶ所の消防屯所が全壊流失し、消防ポンプ車1台が焼失、3台の小型動力ポンプ付積載車が流失している。津波襲来後に浸水域内で多発的に火災が発生し、山沿いの建物に延焼し、山林火災が発生している。



津波直後の安渡地区火災（鈴木亨氏撮影）

消防団員に憧れて消防団に入る

私は、この大槌で生まれ、育ちました。叔父さんが消防団に入っていて、子どもの頃、消防ポンプ車に乗せてもらって、「消防」に触れ合う機会が多かったので、ずっと消防職員に憧れていたんです。消防団に入ったのが平成元年ですから団歴23年になります。仕事は、漁業協同組合に勤めています。

所属する大槌町消防団第2分団は、震災前で団長と副分団長以下、3部構成になっており、第1部が13名、第2部が13名、第3部が14名の総数42名です。町の条例定数は、1部あたり16名なので欠員状態でした。私は、第2分団第2部に所属しています。分団1個部の消防装備は、消防ポンプ車が1台、ポンプ車に積載している資機材や団



15時21分大槌川堤防を越流し安渡地区に襲来する津波
(鈴木亨氏撮影)

で購入したAEDなど、団として通信できる専用波の無線機は車載無線が1台と携帯無線を部長用と分団長用に各1台がありました。

第2分団は、安渡地区と赤浜地区を担当しており、第1部と第2部は安渡地区を担当し、第3部は赤浜地区を担当していました。第1部と第2部の屯所は海岸沿いの同一建物で、担当エリアも隣同士だったので、団員はその時々々の参集状況によって第1部、第2部に拘り無く消防活動を実施していました。

昼夜を問わず水門を閉鎖できる体制

大槌湾から大槌川にかけて市街地を守るように防潮堤があり、安渡地区内堤防には12ヶ所もの水門があるので、大地震の発生後、まずは水門の閉鎖操作を先に行い、その後避難誘導を行っていました。

水門閉鎖については、3月3日に行う津波避難訓練に併せて分団では、平日昼間を想定した訓練や夜間を想定した訓練など起こりうる事を想定しながら、これまで実施してきたのです。

その中で昼間は、それぞれの団員がいる場所から近い水門を閉鎖してから屯所に集まるルールにしました。

閉鎖の基準は、町の水門管理規定に基づき震度4以上になったら操作をすることになっていました。それも第1部と第2部は、それぞれの消防ポ

ンプ車の行動範囲は決めていましたが、乗る団員はその時々で臨機応変に運用していました。

1年前のチリ地震津波の時は、前日から津波が来るだろうかと分かっていたので水門閉鎖した後、ポンプ車で避難誘導をし、小学校と大槌稲荷神社が避難所になっているのでその付近で待機していました。根っからの大槌の人は、小学校で津波のことを習うので津波に対する意識は高いと思います。

チリ地震津波の時は、堤防の近くの人たちや水産業の人たちは、逃げていたと思います。でも少し高台の街中の人たちは逃げない人も多かったと思います。

漁協にて地震に遭遇、揺れの最中に水門へ

3月11日は、勤め先の漁協の冷凍倉庫にいました。地震の揺れがどんどん大きくなったので津波が来ると思って、同僚に津波が来るから逃げようといって、揺れている最中に自家用車で水門に向かいました。子どもの頃から「地震があったら津波と思え、津波があったら高台に逃げろ」を教え込まれて来たのです。

向かった水門は、魚市場に一番近いところにありました。あのときは、揺れ始めてから30秒ほどで停電したので、水門の自家発電機が起動して閉めることが出来ました。水門が半分近く閉まるのを見届けてから自宅に向かいました。

自宅の前にいた母と近隣の奥さんに「津波が来るから裏山に逃げろ」と伝えて、自宅に置いていた救命胴衣を着て、300mくらい離れた屯所に行きました。

屯所でサイレンを鳴らそうとしましたが、停電で鳴りませんでした。そのため車庫のポンプ車のサイレンを鳴らしながら他の団員が参集するのを待ちました。数分してから1名の団員が参集して来ましたが日中なので他の団員も集まらなと判断して私とその団員の2名で消防ポンプ車に乗って次の水門に移動しました。その水門を閉めてい



- ①職場で地震に遭遇。(14:46) ②揺れが収まらないうちに水門へ。
③水門閉鎖し自宅へ、救命胴衣着装し母と隣の奥さんへ避難指示し屯所へ。
④屯所から消防車で出動。 ⑤～⑦水門3箇所閉鎖。最後の自宅前水門で、母含め近所の人に避難指示。
⑧再度屯所に寄り、海岸方向へ。
⑨もう1台の消防車と会合、地区内水門の閉鎖確認。(15:04) 水門閉鎖に伴う迂回路指示看板設置。大槌交番バトカーから、潮が引いていると聴取。他地区の消防車から、津波襲来との無線傍受。
⑬避難誘導広報しながら、大槌川河口へ移動。津波確認。津波見物者の避難指示誘導。大槌橋の通行止ゲート閉鎖。
⑭津波が堤防越流しそうになった為、更に高台へ移動。その付近に居た人達に避難指示。津波が堤防越流したため我々も避難。(15:21)
⑯安波小学校裏、国道45号線上に避難。地区が孤立した為、我々の消防車も孤立。怪我人等搬送活動実施。

鈴木亨氏「東日本大震災大津波と私の行動」危険学プロジェクト2011.9.10講演資料より

る時に、別の団員が自家用車で来たので他の水門に行くようにお願いしたのです。そこでポンプ車のラジオで大津波警報が発表されていることを知りました。

それから2ヶ所の水門を閉鎖して15時頃に屯所に戻りました。屯所で3人目の団員を乗せてから再出場しました。そこで第2部のポンプ車と合流し水門閉鎖が完了したことを確認したのです。時計を見たら15時4分でした。水門閉鎖に要した時間は、地震発生から18分でした。その場所で街中に進入する一般の自動車を迂回させるために看板を設置しました。

自宅に戻りたい人が多く、車で来て「通せ、通

さない」があって大変だったのを記憶してます。

第2部のポンプ車は、私服の団員もいたので装備の着装もあって屯所に戻って行きました。それから第2部のポンプ車が屯所から出動するのが見えたので、時計を見たこともあって覚えているのですが15時15分頃だったと思います。

我々は、海岸から戻ってきたパトカーから「潮が引いてきた」との報告、そして第3分団の無線から「津波が来た」との情報を受け、すぐに街中を「津波だ逃げろ！」の連呼で走り回りました。

大槌川の河口部で水位が上がってきたのを確認してから高台に逃げたんです。

そんな中でも津波見たさに堤防に人がいて、ま



第2分団3部の消防ポンプ車。分団員3名が運命を共にした
(鈴木亨氏撮影)

た津波を見に行っている中学生たちもいて「お前たち死ぬぞ!!」と叫ぶように言ったのを覚えています。その子どもたちはびっくりして高台へ避難して、たぶん助かったと思います。我々は小学校裏の高台にポンプ車で避難しました。

命を懸けた消防活動

今回の大震災で津波の犠牲になった第2分団の団員は、11名でした。自分自身が活動中は必死でしたから、その後聞いたり、ケガをしながらも助かった方に聞いた話です。従って少し事実と異なるかもしれませんが。しかし犠牲となった団員の活動や活躍を残して行くことが大事だと思っていますのでお伝えしたいと思います。

第2分団第2部のポンプ車は、6名の団員が乗っていました。屯所に寄った後、河口の堤防沿いに車を止めて津波を監視したようです。津波が来ているのを確認してから、急いで戻る途中で、寝たきりの家族を助けて欲しいと依頼され、5名の団員はその家に助けに入りたいです。その直後に堤防を越えてきた津波に巻き込まれて家ごと流されたようです。1名の団員がケガを負いながらも助かったのが後で知ることが出来たのです。

さらに1名は、水門付近で逃げ遅れた人を確認中に犠牲になっています。また1名は、自家用車で避難誘導中に津波に巻き込まれています。第3部の3名は、水門を閉鎖してから避難誘導後に第



瓦礫の中から見つかった第2分団第1部第2部屯所の火の見櫓
(鈴木亨氏撮影)

3部の屯所で車ごと巻き込まれたと聞きました。

最後の方は、私の消防団の先輩でもあり仲間です。1部2部の屯所の屋上で半鐘を鳴らし続けながら津波に襲われて亡くなったのです。半鐘の音が避難所や神社にいても聞こえたと後から町民に聞きました。津波が堤防を越えてから屯所に到達するまで聞こえていたようです。この先輩とは、大地震の直後に、屯所で会っているのです。

丁度、自家用車で駆けつけて来たのでポンプ車に移るように言ったのですが「いいから行け!」と言われて、てっきり自家用だったので車で活動しながら避難されるんだろうと思って、それ以上言わなかったのです。ご本人は、そのときから半鐘を鳴らし続けるつもりでいたのかもしれませんが。この方は、途中出稼ぎされていたので、団歴は20年で地元では大工さんをされていて、大震災前には大工仕事も少なくなったので地元の造り酒屋でアルバイトをしていたのです。あのときも地元にいたので早く駆けつけることが出来たと思います。熱血漢で厳しく若手の団員を指導され、人から慕われる人でした。

4か月も続いた消防活動

第2分団の団員が揃ったのは、その日の夜でした。津波が襲ってきた直後に火災が至るところで発生しました。消火に向かおうとしましたが、沢山の瓦礫で身動きがとれず消火活動に入れません

でした。そのためひどい災害で茫然自失状態のご老人もいて、近くの老人ホームに搬送したり出来ることをやりました。

市街地の火災は、津波の流れに乗って次第に山に移って行きました。内陸の第4分団や第5分団から小型ポンプを持って70名ほどの団員が駆けつけてくれました。ポンプ車よりも小型ポンプは小回りが利きます。川の水利を使うしか無かったので山林火災の消火活動に大変助かりました。

3月13日から緊急消防援助隊や自衛隊が来て、遺体搜索は装備のしっかりとしたそれらの部隊に任せて、我々は山林火災の消火に活動の重点を移行しました。

その後、ポンプや車の燃料に困ったことがありました。なんとか消火活動も続けることが出来て、ようやく鎮火したのは4月5日になってからでした。

最初の頃は、ポンプ車に寝泊まりするような状態でした。消防活動が非常体制から待機体制になるまでの1か月が一番きつかったと思います。

精神的にも一段落したのは、7月に入ってからでした。今（8月末）は、仕事も吉里吉里に仮の事務所が出来てそこで働いています。

津波から地域を守るために

今回の災害を通して、住民個々の命を守るために必要なことをお話したいと思います。

少なくとも津波が襲ってくる可能性のある地域は、小学校から防災教育を徹底すべきだと思います。私自身もそうでしたから、訓練や教育によって得ることは多いですね。もちろん防潮堤などの防災施設も必要です。防潮堤があったために津波が地域に入ってくるのを遅らせることが出来ました。それによって逃げる事が出来た人もいたでしょう。施設がなくても逃げればいいぐらいにならないと駄目だと思います。消防団が子どもたちを対象に普段から津波教育をすることも必要であると考えます。



被災後の大槌町消防団第2分団第1部第2部仮設屯所。右側が町から貸与されたもの仮設屯所。左側が分団でリース契約した屯所事務室兼待機室。

我々の分団では11名の団員が犠牲になりました。団員の命を守ることが重要です。そのためには、

- 水門はない方がいい
- 住民は逃げる
- 消防団もサイレンで一巡したら逃げる
- 国は消防団も避難するという法的な裏付けを整備する

などが必要と思います。

今回、消防団本部の指揮車から「津波が来ている。退避指示」が15時10分前後に何回か指令されたのです。でも住民が残っているのを分かっている消防団は逃げることはできないです。そこを後押しする制度が必要と考えます。

仲間のことを伝えて行きたい

消防団に入って良かったと思っています。震災のあと「おまえのおかげで助かった」「逃げろと言われなければ、家にそのまま居たと思う。津波から逃げられなかったはず」と感謝の言葉が嬉しかった。でも多くの仲間を亡くしました。仲間には、逃げて欲しかった。助かって欲しかった。彼らを忘れないためにも、その活動を記録に残すべきです。私はこれからも彼らのことを伝えて行きたいと思っています。